

惠州附属学校での体育授業

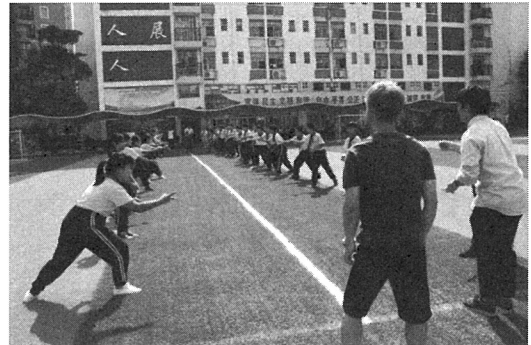
小森 康貴

1 授業構想の意図

訪中経験のある数名の先生方から、中国の体育授業は、技能向上にとっても力を入れている反面、友達と協力したり工夫したりすることにはあまり力を入れていないのではないかという話を聞いた。そこで、友達と協力する必要性があり、なおかつ成功したときに友達と達成感を共有できる運動を行うことにした。

2 授業の様子

最初にウォーミングアップをした。2人1組でジャンケンをして、勝ったら逃げ、負けたら追いかけるゲームをした。何度か繰り返した後に、負けたら逃げ、勝ったら追いかけるルールに変更した。今までと条件が変わったことにより、ジャンケンをした後に逃げるのか追いかけるのか判断できずに動けなくなったり、異なる動きをしてやり直したりしている子どもが見られた。子どもたちは、とても楽しそうにしていた。これで、心も体も温まり、メインの運動にスムーズに移行することができた。



次に、2人1組になり、なわとび運動を行った。1人がなわを回し、もう1人が跳んだ。その際に、「なわを大きく回す」とことと「できるだけ近づく」とことの2つのポイントを示した。子どもは、お互いにタイミングを合わせて跳ぶことができていた。そこで、この運動を生かしてメインの運動「集団なわとび」を行った。

「集団なわとび」とは、5人グループで行い、4人がタイミングを揃えてジャンプをし、回し手がそれに合わせて順番に4人となわとびをする運動である。全員が引っかからずに連続でなわを跳ぶことができれば成功となる。

初めに手本を見せた。4人連続でなわとびをする姿に軽いどよめきが出た。次に、「なわを大きく回す」「できるだけ近づく」の2つのポイントが重要であることを伝えた。

いよいよ、それぞれのグループに分かれて挑戦した。すると、どのグループも4人でタイミングを合わせてジャンプをすることが

できなかった。これではメインの運動ができるはずもなく、子どもはつまらなそうにしていた。この状況を見て、目の前が真っ白になった。どうにかしなければと思い、子どもを集めた。そして、「タイミングを合わせる」ことが成功の第一歩であることと、そのためには「4人でかけ声を合わせる」ことが有効であることを伝えた。

その後、子どもは粘り強く挑戦し続けた。私は、各グループの様子を見ながらアドバイスをしたり一緒にかけ声を合わせたりした。すると、1つのグループが成功した。そのグループの子どもはとても喜んでいて。その様子を見て、他のグループは、自分たちも成功させたいという思いを強くし、練習に力が入りはじめた。その結果、他のグループも続々と成功しはじめた。最終的に、すべてのグループが成功し、どのグループでも歓喜やハイタッチが見られるようになった。

3 感想

「集団なわとび」は、今まで何度も実践してきた運動である。日本では、ジャンプのタイミングを合わせることができない子どもはいなかった。しかし、中国では、ほとんどの子どもがジャンプのタイミングを合わせることができなかった。これが文化の違いなのかもしれない。危機的状況であったが、子どもたちのがんばりもあり、全グループの子どもに達成感を味わわせることができた。予期せぬ事態にいかにか柔軟に対応できるか、自分の力量を問われた授業実践となった。

言葉が通じない子どもに対して授業を成立させるために様々な工夫や配慮をしたことも大きな学びとなった。まず、指示をできるだけ少なくすることや言葉ではなく動きを見せることを、日本で授業する以上に意識した。また、上手にできたときに動きを入れながら大げさに褒めたり、失敗したときに「惜しい」「がんばれ」という思いを動きで表現したりした。これらの工夫や配慮は、日本での授業でも生きることである。体育授業で大切にすべき様々なことを見直すよい機会となった。

今までとは違った状況に挑戦することで新しい見方や考え方を得ることができ、今後生きる貴重な経験となった。機会があったら、ぜひ、もう一度挑戦したい。

